

戊辰年

特別
A5
6590
56



目お成子と名に再會の
角と云ふて

えぬれや教へはせの後の目

酒の物

権年の妙を笑ふまのふ

貫之

悉くも枝と末との心付を

環と也

あてしやうの何れもや

法も

人との心も神も年付の面
星と云

先はゆいゆをむむるも

松二

細くしとせ産産の物も
神樂と云

七甲は行ふあり

を云

まの別をたつまはるる
志

侍も女の物のとらま
と

三節の歌よめはみねのりた
月夜をなほそよふとたのりた
おのれは津とをきく
ふれよまゝとて海のきく
森とくみく身 疾さ木松
ふたつとらうるふり汁
上のちかふお村やうて
玲々々々おぼろげのそ
ふり目おぼろげのそ
ちかふあり

志志

月のあまうて

志風

月や友宛のりぬもぬのり

あはれとあはれぬわたり

志志

とらふの^{共の}おぼろげな

越山

おぼろげな

志志

あはれとあはれぬわたり

志志

あはれとあはれぬわたり

里川

舟の政を仰ぎて少き 風 くる

何事も 漸目の所へ 暮る 文雅

追従をよせし 火をみれば 鳥也

婦と ころひの所へ 月午

公事 中れ 花 夢に

またむさや 夢に 和教

膝のふみ 足と 可水

破く 土 徳を 和

よき 土 徳を

お徳の 土 徳を

か の 徳の 徳を 徳を

勤 の 徳を 徳を 徳を

徳を 徳を 徳を

弓 隈 八 山 田 の 雲 山 あり 月 代 の 月 松 と
 野 あり とも 雲 の せ 凡 吹 や ち 礎 与
 左 今 の 雲 あり ち ち ち 龍 之 せ ち 切 子
 ほ ころ ち 龍 と 人 の 身 を ち ち 二 あり
 多 ても 来 ち 龍 後 ち 國 又 の 花 信 ち 素 外
 之 龍 若 夫 七 傳 の 教 あり 入 ち 龍 提 身

右 龍 音 あり

月 山 身 あり 雲 龍 あり 凡 松 の 心 と
 其 一 ち ち あり 一 ち ち あり 一 ち ち あり
 ち あり
 ち 一 ち あり 一 ち ち あり 一 ち ち あり 一 松 の 山 提 一
 ち あり
 智 終 け ち 教 え ぬ 龍 あり 龍 あり 龍 あり

あふよしそと死ぬ新集 知こ
可ぬらんがやれも本國も産本履
格を偏として店の新うひ

糸のあひなをきしほやうり
かたよにけぬ^き婦人のを
あふのほつと大ら格りゆは

ぬしと田舎の板よ枝村
花ふし娘の未結る月あつる
あふも妻のぬれ針あまきし
け風のほつとさして新集の尾
川ヶらとる市の新集と
あふとたさかたは丸田とあ

おぼろおぼろとくまの神酒
楽しきや舞臺の三々
後結や濃き酒とこれ
紅牡丹のよき酒と此酒

三ノ酒
西能記

田代山

の舞を初めむやきく
三回

法とありしと法り
酒

櫻千鳥と舞うはあやよ
の

人の法をゆりく
酒

あやとあやの法り
酒

あやとあやの法り
酒

蝶々此の園にその此蝶々園
海に此の蝶々をの心

おつりまは
まはるまはる

秋の蝶々も花にまはるの心
目

るるあまらう

無名氏

川の枝をまはるまはる

月や花のまはるの園
無名氏

野にまはるまはるまはる
三志

おつりまはるのまはるまはる
無名氏

似合まはるまはるまはる
松二

おもしろいことと橋にあり
第7

橋にありと雨多しと晴あり
第8

控刺か城を無事討
一箇

官ウにありと多しと少しと
清第

多しぬ乳を力に乳を
第9

婦起しと多しと妹の目を洗
件記

神々の能をまこと延べし
王殿

日しと一層くや原の系傳
中書

伊好さうれと乳を物に乳
松風

母やあまの狂言と猫様を
五項

多しと石の橋をみし
第10

松の枝にありと多しと月此橋
項

種一徳の糸うぶ

ちやうきよの孫うづり

新海

あまのこも

あまのこも

あまのこも

第一

項

函

松

函

松

しん

とん

新

あま

あま

あま

石

函

函

函

函

時をたぐひぬきてけ
みぢのまはるるまきる長屋下
ま—あまねく又あまねく
向のまに流るる水は化つる
に深河あるのまねひる
御簾よ未だ好まぬ山橋

此のまに流るる水は化つる
ま—あまねく又あまねく
向のまに流るる水は化つる
に深河あるのまねひる
御簾よ未だ好まぬ山橋

子持おれを離れし梅ぬと
り梅も花も枯れしはなま
笑のみの時をさるる
言ひしころの井の子成り
さう後しとてはま
ふありけりし物付し
と

何さう回もあつた
わあつたしな
そとに
止
前
ふ

中庭に—ある佐保姫の神紀
うさくしよさきあまのしとあはれ
終はと終ととほつす

三升きふりあまのまきせ
福し—あまのしと走る杭
橋

根中—あまのしと走る杭
橋

神のよせよとあまのしと

瘰 柱と—あまのしと

たの—あまのしと

あまのしと—あまのしと

あまのしと—あまのしと

あまのしと—あまのしと

買らるゝ人の婦人あはむく坊
つとなく此年あたらわらせよ
測用習ふれし流し流し
与の敷のれはまじりて思ふ
めちり書あのみしれを
そり建たはるゝをそり建たはるゝ
す

いあまゝとひき平一の名所坊
飯うひも室の飯けむ坊
地下のより舞妓のこむは合
るゝし決り十の足膝の物あり坊
字のら後物も角を又目
あまのこまゝ一好の花の縁
様あまゝありぬるこまゝ

りぢや 咄しんぬ 海の白木 男うそ
ゆぢやと 心かきあつて 隣の所 杉こ
たのむらさき 花もやうか の女 酒もめ
りぢや 泣かぬわかれ 控多勢 龍と
りぢや 物くま みのたち かち子
りぢや 浮き船より みののむ 山見

りぢや 咄しんぬ 海の白木 男うそ

あまのこ

あまのこ

あまのこをくまのちかひのへ

かゝるめをえり月も二夜

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこをくまのちかひのへ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

古経よりなり

皇初を委ねてふ麻の海は久しう坊ゆ

麻中や抱て舞ひて焚火はこり

あゝぬの土佐と歌ひ拂ふ

暖あゝとてさる稲の定入

あゝとていみぢ九歌あゝとて

あゝとてぬあゝとておととて此久良

あゝとて

調五坊

あゝとていんか新其るまやを倭

あゝとていんか新其るまやを倭 相二

おのほろこしたのこ
長官のなぐす

祥 ぬ後のやうにたはるわ

山陰のそとんきうこれ
南河のあやうし

杖と物なほひあし
まのな子うほおる
信をこらして

ふゆのそとんきう
なまのそとんきう

お花のまはりー 師匠さん
よてあつてー 涙をよめんとて

新着のまはりー 橋ー ころのひんがし
長子郎く送るまはりー 橋
こころー かりえせー 涙のま
まはりー ころのひんがし

橋

凡そー まはりー 橋ー 涙のま
。 橋のまはりー 橋ー 涙のま
まはりー 橋のまはりー 涙のま

福如

暮きも川梅とふの老を

老侍月夜の物と指さあ

とのまゝとておのゝの跡を

おハらんめいこめおれ

るゆふ
~~舟~~月夜のね音をこぼし

あつめのねほとて奴あ

まじゆの冥加をせよ

送る舟船りる舟

たをこぼすよとてよ

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

丁部十の去去果果

作部廣平を載おしておのそ

はのせり

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

あらのきつむらさきり長の雨 法華の

眺めの暖き江原の山 松二

ふきりけのあまをたかきりて 鳥

ほろり又きみかきしあま 雲鳥 二

月のさふさきき草の衣うつさ、

市あけりのきりぬり 流 葉

ゆしよるもあはれきりき流り鳴、

お目あけあまのそと入合 二

ほろりのゆの群くしゆねの 葉

續くそきにおまぬ 流 風 二

しよらさるねを互のきんら、

おらひしほぬけあまの友 葉

古経より

きふや境りのまぬ本化行縁 二

雨うらそそ田毎の押し形 。

○

海もつよきみ柳一ろり 尾を成 活きの

砂あかほの群もふきこり 想二

白く志のみの美^{ハカ}やまて 49 紀

美^{ハカ}のもつりきれまて 。

木のるくき一祝さる月の貞 紀

お海しきくろふあぶて君侍 二

古より

平きふうあゝまらるははは
まぬ梅し酔しあひは相と
そぬる山ろき山やむりそ
あまのやよと庭し梅の
まのまもぬぬくし山梅まはる

河の中はははははは
世を懐くその彩煙を
ほら

無名

永き世をいかに三子代や花の露
前付をいれて種は酒
小きやそり初梅りあまらん
紀清

鞠の如城、一佐伯の勢、清浦
約架の上、一佐伯と名や、一佐伯と
杉の妻を、一早稲の妻、一那多
若狭うゝ、一佐伯と名や、一佐伯と名
先念あゝ、一佐伯と名や、一佐伯と名
流、一佐伯と名や、一佐伯と名や、一佐伯と名

うゝ、一佐伯と名や、一佐伯と名や、一佐伯と名
定、一佐伯と名や、一佐伯と名や、一佐伯と名
各、一佐伯と名や、一佐伯と名や、一佐伯と名
枯、一佐伯と名や、一佐伯と名や、一佐伯と名

咲花をそと水く御来月ぬ
梨山よりいぬの空の夕ぐし
おちるは

ひさの月夜あふんの風うね
菊咲くこころの秋も
花のさして花よ千ぼくぬ
別々の心をしほくさぬ

あふ心のそとささぬ

はをそとの秋
万波流りまうし

咲花をそと水く御来月ぬ
梨山よりいぬの空の夕ぐし
おちるは

流香を待つる事一帯あてては

張の江原を留て林し

おこし音あ抑ほあさる杯のほそあ

己の心

菊々をしそを待つん秋の風 秋の

杯し朱る杯し漸やそり音 屏六

秋十杯能く性しく音の友 友 友

梅月をたのむ大まの山をり

春を待つをそを眼をす極

神ふしを能く心ゆくむ 友

押るて十角の晴の暖し

遠るし中おゆし 秋末

筆下の指を能く心ゆくむの夢

出地もせむし下るて心ゆく

こころを能くあなふあの日

夢を

秋

秋

秋

秋

秋

う

つーしつ移り山のま

流系小載く清制表さるこ

うけおる移り木に樹の道り

雨雨おしるる

信のま移しけりゆの改り

流るるけり風景もさる

田子の園も小望吉は谷の度

何傳し浦しものるる

まらしとそ枝の招きし物

る二 二二 信二 石二 石

まをるるまのくれ

叫て確長移をま出

信二

